

清末「詩界革命」起源の再検討

——黄遵憲・梁啓超の明治漢詩との關わり——

蔡

毅

南山大學

一 はしがき

清代末期に梁啟超が唱えた「詩界革命」は、三千年の中華詩史の最後のひと調べとして、かつまた續いて起こった「新文化運動」の前觸れとして、從來より學界の注目を集め、研究成果も續々と發表されている。しかしながら、これまでにおける「詩界革命」の起源に關する考察は、その大部分が、西方文明の東漸や一部の先行者による詩歌創作中における新語詞の運用などといった、中國國內の種々の事象に焦點を當てたものであり、この文學運動の背後にあ

る「日本要素」に對する關心は乏しかった。管見の限りでは、五十四年前の許常安氏が言語學的な角度から「詩界革命」の中の「日製漢語」に言及した論文^①のほかに、一言も論じられていない。筆者は曾て拙作「黄遵憲と日本漢詩」^②において黄遵憲の「新派詩」が明治の「文明開化新詩」の影響を受けている可能性について論じたが、論點は目新しいと言えるものの、各種の現象の羅列に止まり、表面をなぞつたのみで、深く追及するに至らなかった。以上を鑑みると、「詩界革命」の起源の日本との關聯という命題については、基本的に未だ研究の空白部分であると言つてよい。

しかし、はっきりしていることは、「詩界革命」の理論的唱導者であつた梁啟超がこのスローガンを打ち出したのは渡日の後であり、「詩界革命」の創作の代表者であつた黄遵憲もまた、この以前に清朝の駐日公使館の參事官として日本に四年餘り居留していたということである。この二人の主役の日本での滞在歴は、必ずや研究者の關心を引き、そこから進んで「詩界革命」の起源が日本にあるという

「大膽な假説」を産んだはずであるが、今日に至るまで、「慎重な實證」（いずれも胡適の名言、「大膽的假設、小心的求證」）を行った者は見當たらない。その原因は、學界が感性に缺けていたというようなことではなく、恐らくは直接の證據が無いせいであろう——黃、梁兩名の言葉に、これについて言及したものは一つも無いのだ。

周知の通り、梁啟超は日本に亡命していた期間に、文學方面の三大「革命」を唱え、「詩界革命」のほか、「小説界革命」は明治期の「政治小説」を背景とし、彼が日本に亡命する船上で東海散士（柴四朗）の『佳人之奇遇』を譯そうと試みたことは、文壇の佳話となっている。また「文界革命」は明治期の「文體改良」を背景とし、彼は更に明確に、徳富蘇峰の影響を受けたと説明している。このほか、彼は「畫界革命」まで唱えたが、これも詩を贈った鄭秋蕃がオーストラリアに居留して受けたヨーロッパ繪畫の影響と明言している。しかしこれらの「革命」の中で、彼が最も早くに腕を振り上げ叫んだ「詩界革命」だけが、日本について片言隻語すら無い。彼よりも二十年餘り早く來日

した黃遵憲も、自身の「新派詩」創作に言及する時、日本方面からの啟示については口を噤んでいる。この難題に向き合う時、當事者が「自供」しない以上、解決しようとする者は解決の絲口を見付けられないのだから、この重要な命題が棚上げされてしまったのも當然である。

しかしながら、本人が言わないからといって、研究者も言つてはならないということがあろうか？ 信無くば立たず、言必據有りの原則に基づき、淺識を顧みず、「詩界革命」の起源の明治漢詩との關りについて、新たな探索を試みてみたい。

二 「詩界革命」とは

一八九九年（清光緒二十五年、明治三十二年）十二月、梁啟超は横濱から乗船してハワイへ向かう途中、「詩界革命」についての著名な論述を書き記した。梁啟超の思考回路を完全に把握するため、紙幅を費やすのを憚らず、關聯部分を具に引用しておく。

二十五日、風稍定、如初開船之日。數日來偃臥無一事、乃作詩以自遣。余素不能詩、所記誦古人之詩、不及二百首、生平所爲詩、不及五十首。今次忽發異興、兩日內成十餘首、可謂怪事。余雖不能詩、然嘗好論詩、以爲詩之境界、被千餘年來鸚鵡名士（余嘗戲名詞章家爲鸚鵡名士、自覺過于尖刻）占盡矣。雖有佳章佳句、一讀之、似在某集中曾相見者、是最可恨也。故今日不作詩則已、若作詩、必爲詩界之哥倫布、瑪賽郎然後可。猶歐洲之地力已盡、生產過度、不能不求新地於阿米利加及太平洋沿岸也。欲爲詩界之哥倫布、瑪賽郎、不可不備三長：第一要新意境、第二要新語句、而又須以古人之風格入之、然後成其爲詩。不然如移木星金星之動物以實美洲、瑰偉則瑰偉矣、其如不類何。若三者具備、則可以爲二十世紀支那之詩王矣。宋明人善以印度之意境語句入詩、有三長具備者、如東坡之「溪聲便是廣長舌、山色豈非清靜身。夜來八萬四千偈、他日如何舉似人」之類、真覺可愛、然此境至今日、又已成舊世界。今欲易之、不可不求之於歐洲。歐洲之意境語句、甚繁富而瑋異、得之可以陵轢千古、涵蓋一切、今尚未有其人也。時彥中能爲詩人之詩而銳意欲

清末「詩界革命」起源の再檢討（蔡）

造新國者、莫如黃公度。其集中有今別離四首、又吳太夫人壽詩等、皆純以歐洲意境行之、然新語句尙少。蓋由新語句與古風格常相背馳、公度重風格者、故勉強之也。夏穗卿、譚復生皆善選新語句、其語句則經子生澀語佛典語歐洲語雜用、頗錯落可喜、然已不備詩家之資格。試舉其一二。（中略）鄭西鄉自言生平未嘗作一詩、今見其近作一首云：太息神州不陸浮、浪從星海狎盟鷗。共和風月推君主、代表琴樟唱自由。物我平權皆偶國、天人團體一孤舟。此身歸納知何處、出世無機與化遊。讀之不覺拍案叫絕、全首皆用日本譯西書之語句、如共和、代表、自由、平權、團體、歸納、無機諸語、皆是也。吾近好以日本語句入文、見者已詫贊其新異、而西鄉乃更以入詩、如天衣無縫。「天人團體一孤舟」、亦幾於詩人之詩矣。吾於是乃知西鄉之有詩才也。吾論詩宗旨大略如此。然以上所舉諸家、皆片鱗隻甲、未能確然成一家言。且其所謂歐洲意境語句、多物質上瑣碎粗疏者、於精神思想上未有之也。雖然、即以學界論之、歐洲之真精神、真思想、尙且未輸入中國、況於詩界乎。此固不足怪也。吾雖不能詩、惟將竭力輸入歐洲之精神思想、以供來者之詩料

可乎。要之支那非有詩界革命、則詩運殆將絕、雖然、詩運無絕之時也。今日革命之機漸熟、而哥倫布、瑪賽郎之出世、必不遠矣。上所舉者、皆其革命軍月暈礎潤之徵也、夫詩又其小焉者也。

二十五日、風 稍定まり、初めて船を開くの日の如し。

數日來偃臥し一事無く、乃ち詩を作り以て自ら遣る。余素より詩を能くせず、記誦する所の古人の詩、二百首に及ばず、生平爲る所の詩、五十首に及ばず。今次忽として異興を發し、兩日の内に十餘首を成すは、怪事と謂ふべし。

余 詩を能くせずと雖も、然るに嘗て詩を論ずるを好み、以て詩の境界と爲すは、千餘年來鸚鵡名士（余 嘗て戯れに詞章家に名づけて鸚鵡名士と爲し、自ら失刻に過ぐと覺ゆ）に占め盡くされり。佳章佳句有りと雖も、一たび之を讀めば、某集中に在り曾て相い見る者に似る、是れ最も恨むべきなり。故に今日詩を作らざれば則ち已め、若し詩を作れば、必ず詩界の哥倫布、瑪賽郎爲りて然る後に可なり。猶お歐洲の地力已に盡き、生産度を過ぎ、新地を阿米利加及び太

平洋沿岸に求めざる能わざるがごときなり。詩界の哥倫布、瑪賽郎爲らんと欲すれば、三長を備えざるべからず。第一に新しき意境を要し、第二に新しき語句を要し、而も又た須く古人の風格を以て之に入り、然る後に其れ詩を爲るを成すべし。然らざれば木星金星の動物を移して以て美洲を實たすが如く、瑰偉なれば則ち瑰偉なり、其れ類せざるを如何せん。若し三者具に備われば、則ち以て二十世紀支那の詩王爲るべきかな。宋明の人 善く印度の意境語句を以て詩に入れ、三長の具に備うる者有り、東坡の「溪聲便ち是れ廣長の舌、山色豈に清靜の身に非ざるや。夜來八萬四千偈、他日如何にして人に舉似せん」の類の如く、眞に愛すべしと覺え、然るに此の境 今日に至り、又た已に舊世界と成る。今 之を易えんと欲すれば、之を歐洲に求めざるべからず。歐洲の意境語句、甚だ豊富にして瑋異たり、之を得れば以て千古を陵轢し、一切を涵蓋すべきも、今尙お未だ其の人有らざるなり。時彦の中 能く詩人の詩を爲して銳意 新國を造らんと欲する者は、黃公度に如く莫し。其の集中に今別離四首、又た吳太夫人壽詩等有り、皆純に

歐洲意境を以て之を行ひ、然るに新しき語句は尙お少なし。蓋し新しき語句 古き風格と常に相背馳するに由らん、公度は風格を重んじる者、故に勉めて之を避くるなり。夏穗卿、譚復生皆善く新しき語句を選び、其の語句なれば則ち經子の生澀語佛典語歐洲語を雜用し、頗る錯落喜ぶべく、然るに已に詩家の資格を備えず。試みに其の一二を舉ぐ。

(中略) 鄭西郷自ら生平未だ嘗て一詩を作らずと言う、今其の近作一首を見るに云えらく、太息す 神州 陸浮せず、浪 星海に従い盟鷗に狎す。風月に共和し君主を推し、琴樽を代表し唱うこと自由なり。物我平權 皆偶國、天人團體 一孤舟。此の身を歸納するに 知る 何處なるを、出世に無機にして與に化遊す。之を讀みて覺えず案を拍ちて叫絶し、全首皆日本の西書を譯すの語句を用う、共和、代表、自由、平權、團體、歸納、無機の諸語の如き、皆是なり。吾 近ごろ日本語を以て文に入るを好み、見る者は已に其の新異を詫贅し、而るに西郷 乃ち更に以て詩に入れ、天衣に縫無きが如し。「天人團體 一孤舟」も亦た詩人の詩に幾きかな。吾 是に於て乃ち西郷の詩才有るを知

るなり。吾詩を論ずるの宗旨 大略此くの如し。然るに以上に掲ぐる所の諸家は、皆片鱗隻甲、未だ能く確然として一家言を成さず。且つ其の所謂歐洲の意境語句、多く物質上の瑣碎粗疏たる者は、精神思想上に於て未だ之有らざるなり。然りと雖も、即ち學界を以て之を論ずるに、歐洲の眞の精神、眞の思想は、尙お且く未だ中國に輸入せられず、況んや詩界に於てをや。此れ固より怪しむに足らざるなり。吾 詩を能くせずと雖も、惟だ將に力を竭くして歐洲の精神思想を輸入し、以て來者の詩料に供せんとす、可なるか。之を要するに支那 詩界革命有るに非ざれば、則ち詩運殆ど將に絶えんとす、然りと雖も、詩運 絶ゆるの時無きなり。今日 革命の機漸く熟し、而して哥倫布、瑪賽郎の世に出づるは、必ず遠からざるかな。上に掲ぐる所の者は、皆其の革命軍の月暈礎潤の微なり、夫れ詩は又た其の小焉なる者なり。

(梁啓超「汗漫錄」、『清議報』三十五冊、一九〇〇)

この一段の要點(下線部)を抜き出すと、以下の五つの

事項となる。

一、梁啟超は作詩を善くせず、記誦する古人の詩も少ないと自稱している。梁啟超の現存する詩詞作品は合わせて約五百首有るが、この文を表した時には僅か「五十首に及ばず」、しかしこの寥々たる少數の作品の中に、既に「詩界革命」の創作が實踐されており、戊戌變法以前、彼は夏曾佑、譚嗣同らと共に「新學の詩」を作ったことがあったが、夏、譚の作は生硬で牽強なものが多く、「已に詩家の資格備えず」、世の中に知られなかった。

二、詩を能くせずと雖も、然るに詩を論ずるを好む。彼は中國の詩界は長きに渡って美辭麗句を斷片的に取り扱う「鸚鵡名士」に占據され、使い古された陳腐なものばかりで目新しさが少しも無く、既に停滯した状態にあつて、革命を行わなければ減びるしかないと考えていた。

三、「詩界革命」の基準は三つ有る。一つは「新意境」、即ち新鮮な内容である。彼が特に重視するのは、「歐洲意境」、即ち歐米から來た文明開化である。二つ目は「新語言」、即ち清新な表現である。彼が特に強調するのは、「和

製漢語」であり、「吾 近ごろ日本語句を以て文に入るを好み、見る者は已に其の新異を詫贊し」、この種の試みは未だ文を作ることに止まっていたとはいへ、鄭西郷がこれを「詩に入れ」たように、實現は間近であつた。三つ目は「舊形式」、即ち舊體詩固有の「古人の風格」を保つことであり、作品の見た目はなお傳統的な詩歌の體裁と様式のままであつた。

四、「詩界革命」には既に成功した範例があり、代表的な作家は黃遵憲である。梁啟超は特に「今別離」四首を標榜し、「銳意 新國を造らんと欲」し、詩歌の領域に率先して新天地を拓いたと賞賛した。彼は黃遵憲の詩には「新語句尙お少なし」と思っていたものの、新語句は舊形式としばしば矛盾するものであるとして、黃遵憲の意圖的に回避した手法に理解を示した。實際には黃遵憲はこれらの「新語句」、即ち「和製漢語」を既に熟知していたことが、『日本雜事詩』や『日本國志』の中に多數使用されていることから明らかである。

五、「詩界革命」の機は既に熟しており、傑出したリ

ダーが必ず出現する。梁啟超は「詩界革命」の領袖を自任してはいなかったが、彼の聲を振り絞り世の人の目を覺まさせようとする態度には、今の世において自分がやらねば誰にできるかという氣概が窺える。

以上が梁啟超の唱えた「詩界革命」の主張の要點である。中國詩史を綜覽しても、このように過去に斷固として別れを告げ、全力で新時代を叫んだ宣言は、見たことも聞いたこともないと言つてよく、空前であるのみならず、恐らくは絶後のものであらう。

それでは、梁啟超のこのような鮮明で徹底した「詩界革命」の思想とは、どこから來たものであったのか。廣義の視點で言えば、彼が日本に亡命した後、多くの方面から明治維新の成功の刺激を受け、中國も廣く舊弊を捨て革新を進めなければならぬと考え、明治年間に流行した「破壊主義」を信奉したことは、彼の思想の變化における一つの重要な側面であるが、本稿ではそれに關しては論じない。ここでは狹義の視點から、「詩界革命」の主張の中に投影された日本——明治時代における「文明開化新詩」の流行

と「漢詩改革」運動の勃興について、具體的に追究してみたい。

三 明治漢詩壇の新風

「詩界革命」の中での黃遵憲の創作實踐と梁啟超の理論的主張は、中國詩史上で見ても間違ひなく前人未到であり、長く閉塞して活氣が失せていた詩壇に一陣の新風を吹き込んだ。しかし東のかた日本に目を向けてみれば、明治維新の大波の中、歐米の風雨に洗われ、日本の漢詩壇は疾うに率先して自己を改革しており、東アジア漢字文化圏の文學史という大河の「支流」が「主流」に先驅けて漢詩改革の壯大な波を巻き起こしていたことがわかる。

まず、創作の側面から見てみよう。梁啟超の言う「新意境」、「新語句」は、日本では「文明開化新詩」と呼ばれる。若干の具體的な實例を擧げてみる。

明治六年（一八七三）、成島柳北が歐米周遊から歸還し、『航西雜詩』を出版したが、詩集の中からは西洋の風情が吹き付けて來るようである。

明治八年（一八七五）、森春濤が『東京才人絶句』を編み、川田甕江の序に、「昔者詠物、花鳥風月、而今則石室電機、瀛車輪船、耳目所觸無一非新題目。……森翁此編、作詩史讀、可也。即作文明史讀、亦無不可。（昔者 物を詠むに、花鳥風月、而るに今は則ち石室電機、瀛車輪船、耳目の觸るる所一つとして新題目に非ざる無し。……森翁は此編、詩史を作り讀むも可なり、即ち文明史を作り讀むも、亦た不可無し。）」文明を宣揚することに全力を傾けている。

同年、森春濤主編の雑誌『新文詩』が創刊された。題名をわざと「新聞紙」と同じ音にし、漢詩文が時代とともに進化し、押し寄せて来る西洋文明に對抗することを鼓吹した。

明治九年（一八七六）、宮内貫一と平山果が編んだ『日本開化詩』は、時の「文明開化新詩」の集大成と呼ぶに値する。目録の一部を見ただけでも、開化進歩、自主自由、男女同權、共和政治、郵便局、新聞紙、電信機、鐵道、瓦斯燈、蒸氣船、寫眞、寫眞鏡、洋品店等等、その内容の洋風っぽい物に溢れ、多種多様であることを感じ取ることがで

きる。

明治十年（一八七七）、河口寛が『海外詠史百絶』を刊行したが、作者には外遊の經歷が無く、このことは、日本を一步も出たことの無い日本人もまた、世界に關心を抱いていたことを示している。

要するに、黄遵憲が明治十年（一八七七）年末に日本に赴くよりも前に、日本漢詩壇の「文明開化新詩」は多様な盛況振りを示し、明治の世が終わるまで、この熱氣は些かも冷めなかつたのである。黄遵憲は元來詩歌革新の意識を持っていたのであるから、日本に滞在した四年餘りの間、見れども見えず、全くの無關心、というわけにはいかなかった。このことについては以前に黄遵憲について論じた拙作に指摘しているが、ここに更に證據を補っておきたい。

黄遵憲は日本の現代詩や和歌についても日頃から關心を持っており、晩年に梁啟超に宛てた書簡の中で次のように言っている。

鼓勇同行之歌、公以爲妙。今將廿四篇概以抄呈。如上篇

之敢戰、中篇之死戰、下篇之旋張我權、吾亦自謂絕妙也。

此新體、擇韻難、選聲難、著色難。(日本所謂新體詩何如？

吾意其於舊和歌、更易其詞理耳、未必創調也。便以覆我。)雖然、

願公等之拓充之、光大之也。詩由『軍國民篇』來、轉以示奮翻生。

同行を鼓勇するの歌、公以爲えらく妙なり。今廿四篇を將て概して以て抄呈す。上篇の敢戰、中篇の死戰、下篇の旋張我權の如き、吾も亦た自ら謂えらく絶妙なり。此の新體、韻を擇ぶに難く、聲を擇ぶに難く、色を著すに難し。

(日本の所謂新體詩や何如？ 吾意えらく其の舊和歌に於けるや、更に其の詞理を易うるのみ、未だ必ずしも調を創らざるなり。便ち以て我に覆す。)然りと雖も、公等の之を拓充し、之を光大するを願うなり。詩『軍國民篇』由り來たり、轉じて以て奮翻生に示す。

(黃遵憲致梁啟超、一九〇二、十一、三〇)

この中の「新體詩」は、恐らく日本の現代の自由體詩を指していると思われるが、この種の作品にさへ留意してい

清末「詩界革命」起源の再檢討(蔡)

るのに、彼が一生涯寢ても覺めても考え續け、心血を注いだ漢詩については、日本人の作品であつても顧みないのだろうか。一方で書簡の中に言う「同行を鼓勇するの歌」とは、彼が蔡鍔(筆名奮翻生)の『軍國民篇』の爲に作つた「出軍歌」のことで、梁啟超は曾て口を極めて賞讃し、「詩界革命」の極致であると稱した。

往見黃公度出軍歌四章、讀之狂喜、大有含笑看吳鉤之樂。嘗以錄入小說報第一號。頃復見其全文、乃知共二十四首、凡出軍、軍中、還軍各八章、其章末一字、義取相屬、以鼓勇同行、敢戰必勝、死戰向前、縱橫莫抗、旋師定約、張我國權二十四字殿焉。其精神之雄壯活潑、沈渾深遠不必論、即文藻亦二千年所未有也。詩界革命之能事、至斯而極矣。吾爲一言以蔽之曰、讀此詩而不起舞者、必非男子。

往に黃公度の出軍歌四章を見、之を讀みて狂喜し、大いに笑いを含みて吳鉤を看るの樂有り。嘗て以て錄して小説報第一號に入る。頃く復た其の全文を見、乃ち共に二十四首なるを知る、凡そ出軍、軍中、還軍各八章、其の章末一

字、義取りて相屬し、鼓勇同行、敢戰必勝、死戰向前、縱橫莫抗、旋師定約、張我國權二十四字を以て殿す。其れ精神の雄壯活潑、沈渾深遠必ずしも論ぜず、即ち文藻も亦た二千年未だ有らざる所なり。詩界革命の能事、斯に至りて極まれり。吾爲に一言以て之を蔽いて曰く、此の詩を讀みて起ちて舞わざる者は、必ず男子に非ず。

(梁啓超『飲冰室詩話』)

蔡鍔の『軍國民篇』は、日本が「獨獲爲亞洲之獨立國（獨り亞洲の獨立國と爲るを獲）」た所以こそは、その「尙武精神」を持つていることにありと明確に指摘し、併せて日本の「議會政治の父」と稱えられる尾崎行雄の『支那處分案』の語を引用して言う。「支那人系尙文之民、而非尙武之民、系好利之民、而非好戰之民。（支那人は尙文の民にして、尙武の民に非ず、好利の民にして、好戰の民に非ず。）」時代の惡弊を指摘して痛切に自省し、日本を手本としようとしたことが、端々から窺える。ならば、黃遵憲は同様にどのような「尙武精神」の影響を受けたことはなかっただろうか。

うか。これは推測に過ぎないが、ここに附記しておく。

次に、理論の側面から見てみよう。色鮮やかな創作の花は、必然的に豊かな理論の實を結ぶ。當時の日本漢詩界には「詩界革命」という説は無かつたけれども、似たような言い方、例えば「漢詩改革」や「漢詩改良」、「漢詩革新」等等は、既に續々と登場していた。

改革派の説 從來の漢詩は大概作家自身の述懐に止まり、其資料の範圍極めて狭小なるを以て、新意匠を出すべき餘地なく、従て其の作る所多くは雕蟲の末技たるを免れず、新文明の空氣を呼吸し、複雜の事物に遭遇する今日かかる窮屈なる範圍内に踟躕し居りては、到底明治の詩人たる本分を盡すことを得べからず。且つ漢詩の田地は李杜韓白を始め、古人既に開墾し盡くして復た餘す所なし。従て從來漢詩の用語等も千篇一律、陳陳相因り、毫も新機軸を出すこと能はず。今に當り猶舊來の區域を守るが如くんば、寧ろ作らざるの優れるに如かず。されば、今後苟も詩人として世に立たんとするものは、濶大の眼光と偉大の觀念とを

以て、精神上・形骸上共に舊來の窠臼を脱し、之が一大改良を行はざるべからず。而して之を爲すには從來の如く述懐詩に偏せずして、大に敘事詩を振起し、廣く通韻を用ひて千韻貳千韻を重ね、以て彼西詩に匹敵する程の大著述を爲すこと一なり。從來漢詩の範圍に踰踏せずして、西詩の材料趣味等を頻に注入して、詩骸の新面目を開くこと二なり。是れ獨り今日にありて必要なるのみならず、漢詩を將來に持續せしむるに於て大に效あるべきなり。且つや支那に於ても早晚詩學上に一變遷を來すべき時あるべければ、之に先ちて第一鞭を着けんと豈我國民の名譽にあらずや。或は曰く…從來の漢詩は多く艱澁に涉り、殊に典故などを多く用ふされは到底平民的文學とはなしがたし。今に當り之に放任せば、將來漢詩の命脈危からん。故に今後詩を作らんには、宜しく字句を平易にし、故事などは成るべく用ひざる様にすべし。

〔漢詩家二派〕、『早稻田文學』第六號、一八九一、十二

この文は、「從來漢詩の用語等も千篇一律、陳陳相因」

清末「詩界革命」起源の再検討（蔡）

ることを鋭く指摘し、作られるものが「多くは雕蟲の末技」であり、時勢として必ずや「一大改良」が行われねばならないとして、中國本土にも遅かれ早かれ「詩學上に一變遷」が発生すると預言している。そして變革の方向とは、まさに「新意匠」、「新文明」、「新機軸」、「新面目」、および「西詩の材料趣味」であり、梁啟超の「新意境」、「新語句」、および「歐洲意境」を振り返ってみれば、なんと斯くも似通っていることか。實のところ、作者は更に急進的な主張を持っている。

漢詩家に長篇の敘事詩を起さんと欲して漢詩の舊格を破り、一新骸を創作せんと企つる改革派ある由は已に前號の報道に於て語りたりき、其うち最も極端なるは韻・平仄をも廢すべしと主張せりとときけり。（中略）

（第二）改革とは漢詩の改革かはた國詩の新骸を興さん第一手段として漢詩を改革せんとするか、いづれぞ（爰に國詩といふは、國語と漢語とを混交して作りたる律語をいふ）。

(第二) 若し漢詩の改革を本意なりとせば、たとひ本國支那に先だちて第一鞭を着けんこと、我國民の名譽なりとするも(はた本國を凌ぐこと出來得べしとするも)國詩を改革することの急なるに比ぶれば急ならざるにあらずや。

(第三) 若し新牀の國詩を興さんための方便ならば、市村氏のいへる如く、先づ翻譯に従事せんこと急務なるべし。即ち支那詩を新牀の律格をもて和譯し、若くは歐詩を和譯するが先ならん、若くは歐詩を和譯せん第一手段として之を漢譯せんがためとならば、吾人いまだ其非なるを見ずといへども、轉其漸進に過ぎたるを憾まざるを得ず。また漢詩改革といふ名義の甚だ當らざるを感ず。

(第四) 典故を用ひざるやうにせよとは、翻譯の際に用ふ可らずといふ義か、しからば至論なり。典故は俗に通ぜざるが故にとあらば、吾人は彼の非改革派と共に其非なるを信じ、更めて國詩の必要を辨ぜんと欲す。

之を要するに、吾人は支那詩をもて詩想の一大寶藏なりと信じ、永く我國に榮えんことを願ふと同時に、支那詩の改革は形式の上に於てよりも、むしろ思想の上に於て行は

れんことを望み、敢て其他を願はざるものなり。

〔漢詩改革家〕、『早稻田文學』第七號、一八九二、(一)

押韻や平仄等の詩歌の格律を廢除することを大膽に提唱すると同時に、「漢詩改革」において中國よりも「先だちて第一鞭を着け」なければならぬ、そうしてもしも「本國を凌ぐ」ことが叶えば、「我國民の名譽」である、という野心に燃えている。そのためには、漢詩の「形式」を改革する必要があるばかりでなく、漢詩の「思想」を改革することがより重要になる。ここに引いた二つの文章には署名が無いが、作者を漢詩人である大江敬香と認めることができる。大江敬香は最も早く西洋詩を漢詩に翻譯しようとした先驅者であり、このような學術的な敏感さと先取の意識を備えていたのも、まことに故のあることである。

大江のこれらの言論も世間を驚かしたと言えるが、明治期の著名な哲學者であり漢詩人でもある井上哲次郎の發言は、それ以上に人の耳目を驚かすものであると言える。

井上哲次郎「詩歌改良の方針」に言う。

若し我邦の詩人が改良進歩の念を抱き、新格を開き、創軀を始め、現今の如く己れの腦力を機械的に消耗せずして、更に原造力を養成することを務めば、或は支那文學史上に大影響を及ぼすことなしとも言ひ難きなり。(中略)少年の學生たるもの、決して此の如き希望なき無用の業に従事すべきにあらず。試に思へ。假令ひ小詩短篇を一萬首乃至一億首作りたりとも、如何程の結果を生ずべきか。何等の影響を及ぼすべきか。壯快なる希望は絶えて之れなしと謂はざるべからざるなり。但々新奇の詩格を起し、文學上に一大改良を加へ、支那人をして依準せしむることを務めば、或は絶大の功を奏すべきこともあらん。

『國民之友』第一七九號、一八九三

彼は「新奇の詩格」を創造し、「一大改良」を爲し、更に中國人にもその規則に「依準」させ、日中間漢詩二千年來の交流史における教師と生徒の關係を完全に逆轉させようとした。江戸後期の頼山陽を代表とする日本漢詩人が、

清末「詩界革命」起源の再検討(蔡)

中國の文人と平等に對話することを切に求めたのに比べると、大きく前に進んでいる。

簡単に言えば、維新の時期即ち西洋化の時代に、傳統的な漢詩は窮地に陥っており、變革を必要としていた。そのことについて明治期の文人や學者は既に明確に認識しており、あたかも壯士自ら腕を斷つような類の様々な劇薬を處方し、漢詩という滿身瘡痍の朽木を救おうとしていたのである。梁啟超の「詩界革命」も、それと軌を一にするものと見える。

問題は、梁啟超はこれらの自分よりも遙かに先行する言説を知っていたのか、ということである。

四 梁啟超との接點

この疑問に答えることが、本稿の最大の難所である。冒頭に述べたように、梁啟超は「詩界革命」の主張が日本から影響を受けたものであると明言してはいない。「本人の自供」という直接の證據が無い以上、力を盡くして間接的な證據を集め、困難を承知で包圍していくしかない。

まずは、梁啟超が日本語書籍や刊行物に對し熱烈な興味を持つていたことと、繼續的に大量に閱讀していたことである。彼は日本に亡命する船上で、獨學で「和文漢讀法」を習得し、後にその専門書まで出版している。日本の地を踏んだ後、彼は更に貪るように廣範に渉る日本語の讀物を涉獵し、自ら「毎日閱日本報紙、於日本政界學界之事、相習相忘、幾於如己國然（毎日日本の報紙を閱し、日本の政界、學界の事、相習い相忘れ、幾於己國の如く然り）」^⑧と言うように、過去の新聞や雜誌であつても見逃さなかつた。

梁啟超「祈戰死」

日本國俗與中國國俗有大相異者一端、曰尙武與右文是也。中國歷代詩歌皆言從軍苦、日本之詩歌無不言從軍樂。吾嘗見甲午乙未間、日本報章所載贈人從軍詩、皆祝其勿生還者也。

日本國俗 中國國俗と大いに相い異なる有る者の一端、曰く尙武と右文是なり。中國歷代の詩歌 皆從軍の苦を言うに、日本の詩歌 從軍の樂を言はざる無し。吾 嘗て甲

午乙未の間を見るに、日本の報章の載する所の人の從軍するに贈る詩は、皆 其れ生還する勿きを祝する者なり。

〔清議報〕三十二冊、一八九九

「甲午乙未（一八九四、一八九五）の間を見るに、日本の報章の載する所の人の從軍するに贈る詩」という言葉は、彼が日本に赴く前に出版されていた新聞を閱讀していたのみならず、そこに掲載された漢詩にも留意していたことを示しており、したがって先に引いた漢詩改革に關する論述にも目を通していた可能性がある。そして「尙武」の説についても、先に引用した蔡鍔、黃遵憲の從軍樂を鼓吹する詩文と互いに裏付け合う。

次に、梁啟超が漢詩改革の唱導者と個人的な交流があり、關連する文書を閱讀した體驗も持っていたことである。彼が大江敬香と面識が有ったか否かは確認できないが、井上哲次郎とは確實に往來が有った。

一八九九年五月十三日、富士見軒で開催された哲學會春

期例會で梁啟超は「支那宗教改革論の朗讀」をおこなった。

出席者は、加藤弘之會長、重野安繹、井上哲次郎、三宅雄二郎、姉崎正治ら二十餘名。

（島田虔次編譯『梁啟超年譜長編』）

無論、梁啟超が井上に會ったことがあるからといって、漢詩の改革について話題にしたとは限らない。「日本之有今日、蓋學者之功最高（日本の今日有るは、蓋し學者の功最も高し）^⑨」といい、梁啟超はより多く文章の閲讀を通して、その人を知り、その説を吸収した。その他の明治時代の思想的大家の發言を見てみよう。

德富蘇峰：

此ノ如ク平民主義ノ運動ハ政治ノ世界ヲ一變セントスルニ止ラス。宗教上ニモ、經濟上ニモ、文學上ニモ、學藝上ニモ、技術上ニモ、或ハ人類ノ社交上ニモ、其感情、思想、議論上ニモ其他ノ人事ノ現象ノアラン限りハ恰モ地球ノ表面ニ空氣ノ充滿セサル所ナキカ如ク到ル所……皆平民的ノ

現象ナラサルハナシ。

（『將來之日本』、一八八六）

吾人ハ諸君ト共ニ此ノ第十九世紀宇内文明ノ大氣運ニ賴テ我國ノ時勢ヲ一變シ。以テ智識世界第二革命ヲ成就セント欲ス。

（『新日本之青年』、一八八七）

ここでは漢詩に言及してはいないが、德富蘇峰の「智識世界第二革命」に關する提唱と呼びかけについては、梁啟超は知っていたはずである。

（一八九九年十二月）二十八日（中略）余既戒爲詩、乃日

以讀書消遣。讀德富蘇峰所著『將來之日本』、及國民叢書數種。德富氏爲日本三大新聞主筆之一、其文雄放痛快、善以歐西文思入日本文、實爲文界別開一生面者、余甚愛之。中國若有文界革命、當亦不可不起點於是也。蘇峰在日本鼓吹平民主義甚有功、又不僅以文豪者。

(一八九九年十二月)二十八日(中略)余 既に詩を爲るを戒め、乃ち日び讀書を以て消遣す。徳富蘇峰の著す所の『將來之日本』、及び國民叢書數種を讀む。徳富氏は日本三大新聞主筆の一爲り、其の文 雄放雋快、善く歐西の文思を以て日本の文に入れ、實に文界の別に一生面を開く者爲り、余 甚だ之を愛す。中國に若し文界革命有らば、當に亦た是に起點せざるべからざるなり。蘇峰 日本に在りて平民主義を鼓吹するに甚だ功有り、又た僅かに文を以て豪する者ならず。

〔汗漫錄〕、『清議報』三十五冊、一九〇〇)

注意しておきたいのは、この文章が先に引用した梁啟超の「詩界革命」に關する論述の三日後に書かれたということである。以下に、明治期の別の思想的大家の發言を見よう。

中江兆民：

「漢詩革新の一法」余、佛のコルネイユのシード、シン

ナー、ラシンヌのアタリー、イワイジエニー、近時ユゴーの諸作を讀みて、以爲らく漢詩に於ても亦此種の作を規撫して之を出すときは、大に人耳目を新にするを得ん、但此時に在て字句の雅醇なるを得ること極て難かる可し、槐南、寧齋、種竹の諸子と謀らんと欲せしも竟に果さず、此等大家の筆を以て變化を圖るときは、其功必ず大に觀る可き者有らん。

『一年有半』、一九〇〇、十―一九〇一、三)

中江兆民は梁啟超に對し、深い「學恩」が有ったと言える。梁啟超が主催した『新民叢報』の「學說欄」におけるベーコン、デカルトの紹介(一九〇二)は、中江兆民が翻譯、編集した『理學治革史』(二八八六)を譯したものであった。また、『新中國未來記』(一九〇二)は、中江兆民の『三醉人經綸問答』(二八八七)を參照していたのである。

中江兆民の『一年有半』は梁啟超が「詩界革命」を提唱した後に出版されたといえ、彼が西洋の詩を翻譯して「漢詩革新」の參考にすべき主張は、實際に明治の「文明開化

新詩」の重要なポイントであり、これより前、中村敬宇、

末松青萍、森鷗外、和田垣、内田遠湖、および前述の大江敬香らが、漢詩の形式によって西洋の詩を翻譯しようという積極的な試みを行っていた。この種の「他山の石、以て玉を攻むべし」という時代の風潮は、梁啟超に啟發を與えたと思われる。一年後、梁啟超の「譯詩」が世に出たが、その詩體は漢詩ではなく、この時彼が黃遵憲と共に注目していた「新體」の自由詩であつた。

梁啟超はバイロンの「グレシアの諸島」の第一節を譯している。

咳、希臘啊、希臘啊。

你本是平和時代的愛嬌、

你本是戰爭時代的天驕。

「撒芷波」歌聲高、女詩人熱情好。

更有那「德羅士」「菲波士」（兩神名）榮光常照。

此地是藝文舊壘、技術中潮、即今在否。

算除卻太陽光線、萬般沒了。

清末「詩界革命」起源の再檢討（蔡）

『新中國未來記』、一九〇二

梁啟超は『新中國未來記』の中で特にバイロンの英語の原文を抄録しており、恰も「一次資料」から直接に採用したように見えるが、實際にはそうではなく、バイロンと彼の間にはもう一つ、日本語翻譯の「仲介」が有つたはずである。

木村鷹太郎譯：

嗚呼グレシアの諸島、嗚呼グレシアの諸島。

此地は熱情なる女詩人サツポの戀を爲し又た歌ひたる所。

此地は戰爭及平和の技術の發達したる所。

此地はドロス及びフォイボス諸神の榮えたる所。

とこしへの夏は今も尙ほ此地を飾ると雖、

ただ其太陽を除きては、萬事凡て沒し去れり。

（バイロン：文界之大魔王、一九〇二）

對比してみると、梁啟超の譯は木村譯に追隨していると言える。この時代、この類いの「剽竊」はどこにでもあり、罪に問うべきではないが、梁啟超の「詩界革命」の具體的な創作實踐の作としては、我々はお關心を持つておく必要が有る。

明治期の漢詩壇において、前に引いた大江、井上らの專論の他にも、漢詩改革に關する類似した言い方を時折目にする。當時の普遍的な「共通認識」であつたとさへ言えよう。

小野湖山は松岡毅軒「上野公園博覽會開場……」詩を評して次のように言う。

事新、則字面亦不得不新。能用新字面以作穩雅詩、非毅軒翁決不能也。

事 新たなれば、則ち字面も亦た新たならざるを得ず。能く新たなる字面を用いて以て穩雅なる詩を作るは、毅軒翁に非ずんば決して能わざるなり。

〔新文詩〕二十一集、一八七七

宮崎津城は井上哲次郎「孝女白菊詩」を評して言う。

井兄此篇、取泰西詩意、出以漢土文字、在本邦實屬剽體、亦可謂能變者矣。

井兄の此の篇、泰西の詩意を取り、出だすに漢土の文字を以てし、本邦に在りては實に剽體に屬し、亦た能く變ずる者と謂うべし。

〔異軒詩鈔〕卷下、一八九〇

試みに陳三立と梁啟超の、黃遵憲の名作「今別離」四首に對する贊語を比較してみる。

以至思而抒通情、以新事而合舊格、質古淵茂、隱惻纏綿、蓋闢古人未曾有之境、爲今人不可少之詩、作者神通至此、殆是天授。

至思を以て而して通情を抒べ、新事を以て而して舊格に合わせ、質古淵茂、隱惻纏綿として、蓋し古人の未だ曾て有らざるの境を闢き、今人の少くべからざるの詩と爲り、作者の神通 此に至り、殆ど是れ天授なり。

近世詩人、能熔鑄新理想以入舊風格者、當推黃公度。

……黃公度集中名篇不少、至其今別離四章、度曾讀黃集者、無不首記誦之。陳伯嚴推爲千年絕作、殆公論矣。余嚮者每章能舉其數聯、顧迄不能全體成誦、憤恨無任。季廉不知從何處得其副本、寫以見寄、開緘不自知其距躍三百也。亟爲流通之於人間世、吾以是因緣、以是功德、冀生詩界天國。

近世の詩人、能く新理想を熔鑄して以て舊風格に入る者は、當に黃公度を推すべし。……黃公度集中名篇少なからず、其の今別離四章に至りては、度るに曾て黃集を讀む者は、首に之を記誦せざる無し。陳伯嚴推して千年の絶作と爲す、殆ど公論なり。余嚮者、每章能く其の數聯を擧げ、顧るに迄に能く全體の成誦をせざるは、憤恨任うる無し。

季廉 知らず何處より其の副本を得るか、寫して以て寄せられ、開緘 自ら知らず 其の距躍三百なり。亟めて之を人間世に流通するは、吾是を以て因緣とし、是を以て功德とし、冀わくは詩界の天國に生まれん。

清末「詩界革命」起源の再検討（蔡）

陳三立、梁啟超が「抄襲」したとは斷言できないが、西洋文明の潮流が巻き起こって來ている時代に、日中兩國の漢字文化の子孫達が傳統を護るために出した處方箋が、なんとこんなにも期せずして一致するということは、まことに意味深長である。

以上、主に梁啟超の「詩界革命」理論の來源について探求してきたが、以下では二つの創作的實例を見てみよう。

成島柳北「大和魂——憫無獨立心者也」

大和魂、大和魂、魂已失果唯口言。人間竟畢貴獨立、洋東西何足論、奴隸根性卑屈主義。其人毫無獨立志、自稱我有大和魂。魂也有靈必大恚、嚙人脛貴人金、改己說變己心。面皮如鐵欲瞞世、智慧何淺慾何深。汝若不能食汝力、宜折汝筆棄汝墨。欲爲役人爲役人、欲爲乞食爲乞食。鷺自是鷺鴉自鴉、休在中間摺胡麻。世上豈無照魔鏡、分明照見正與邪。吾探富士千秋雪、濺汝頭腦洗汗血。嗚呼大和魂卽獨立

心、嗚呼大和魂卽自由説。

大和魂、大和魂、魂已に失い果て唯だ口に言う。人間
竟畢獨立を貴ぶ、洋の東西 何ぞ論ずるに足らん、奴隸根
性卑屈主義。其の人毫も獨立の志無く、自ら稱す我に大和
魂有りと。魂也た靈有らば必ず大いに悲らん、人の脛を噛
み人の金を貰い、己の説を改め己の心を變ずる。面皮 鐵
の如く世を瞞かんと欲し、智慧何ぞ淺く慾何ぞ深し。汝若
し能く汝の力に食まざれば、宜しく汝の筆を折り汝の墨を
棄つべし。役人爲るを欲すれば役人爲り、乞食爲るを欲す
れば乞食爲れ。鷲は自からは鷲 鴉は自からは鴉、中間に
在りて胡麻を摺るを休めよ。世上豈に照魔鏡無く、分明に
正と邪を照見せん。吾 富士千秋の雪を採り、汝の頭腦を
濺ぎ汗血を洗わん。嗚呼 大和魂卽ち獨立の心、嗚呼 大
和魂卽ち自由の説。

(三木貞一『古今狂詩大全』所收、一八九〇)

梁啓超「志未酬」

志未酬、志未酬、問君之志幾時酬。志亦無盡量、酬亦無

盡時。世界進歩靡有止期、吾之希望亦靡有止期。衆生苦惱
不斷如亂絲、吾之悲憫亦不斷如亂絲。登高山復有高山、出
瀛海更有瀛海。任龍騰虎躍以度此百年兮、所成就其能幾許。
雖成少許、不敢自輕。不有少許兮、多許奚自生。但望前途
之宏廓而寥遠兮、其孰能無感於余情。吁嗟乎男兒志兮天下
事、但有進兮不有止、言志已酬便無志。

志未だ酬いられず、志未だ酬いられず、問う 君の志幾
時酬いらるるや。志も亦た無盡の量、酬いらるることも亦
た無盡の時。世界の進歩 止期有る靡く、吾の希望も亦た
止期有る靡し。衆生の苦惱は斷えず亂絲の如く、吾の悲憫
も亦た斷えず亂絲の如し。高山に登らば復た高山有り、瀛
海を出づれば更に瀛海有り。龍騰虎躍に任せて以て此の百
年を度る、成就する所其れ能く幾許ぞ。少許を成すと雖も、
敢えて自ら輕んじず。少許有らずんば、多許奚ぞ自ら生じ
ん。但だ前途の宏廓にして寥遠たるを望み、其れ孰ぞ能く
余の情に感ずる無き。吁嗟乎 男兒の志や天下の事、但だ
進む有りて止む有らず、志已に酬いらると言うは便ち志無
し。

無論梁啟超が成島柳北を模仿したなどと非難することは決してできない。このような形式は唐代の白居易『新樂府』から既にあるものだ。しかし「新語」を使い、詩格を無視するという作法において、兩者は殆ど同じ流れを汲んでいる。このことは十九世紀末から二十世紀初にかけて、日中の漢詩壇に共通する革新の構想と價值觀の傾向が有ったことを示しており、兩者間の相互の關聯は、重視するに値する。

五 明言を避けた原因

もしも上述のように黃遵憲、梁啟超が明治期の「文明開化新詩」と「漢詩改革」の影響を受けていたという推論が成り立つならば、次の疑問に答えなければならぬ。何故、彼ら自身は一言も直接言明しなかったのか、ということである。

まず黃遵憲について略述する。以前に拙作「黃遵憲と日

本漢詩」で分析を加えたことがあり、それによれば原因は主に黃遵憲の周邊には「文明開化新詩」に對して排斥する態度を取る保守的な文人が多く、また彼自身「本場」から來た中華の正統文化の代辯者として、日本人の目の前でこうした「奇句淫詞」を稱賞するのは困難だったからである。漢詩と無縁のイギリスに渡ってからは、明らかにこうした懸念が無くなったために、「今別離」のような「千年の絶作」を書き著すことができたのである。しかし、黃遵憲が自身が日本滞在中に受けた啟發について語ろうとしなかった、その原因はもしかすると梁啟超と概ね近いかも知れない。

言うを憚る必要も無く、梁啟超は日本に赴いてから、明治維新の獲得した普遍的な社會の進歩を見、おおいに震撼し、そのため日本の様々な新思潮を素直に心から、しかも全面的に受け入れた。ならば、梁啟超が日本の思想界の自身に與えた其の他の影響について言及する時には殆どありのままに語って憚らないのに、「詩界革命」の中の「日本要素」については一言も無く、口を固く噤んでいるのは何

故なのだろうか。筆者が思うに、恐らく二つの原因がある。一つ目は、彼が日本漢詩の水準はごく平凡であると思つていたからである。

日本園攻旅順軍司令長官乃木希典將軍……日人某爲三典歌以頌之、文曰、……詩雖平平、然能寫出日本武士道之氣概、讀此而知日人所以享戰勝之名譽者、非偶然也。故錄入詩話。

日本の旅順を圍攻する軍の司令長官乃木希典將軍……日人の某は三典歌を爲りて以て之を頌し、文に曰く、……詩は平平と雖も、然るに能く日本武士道の氣概を寫し出し、此れを讀みて日人の戰勝の名譽を享くる所以を知る者は、偶然に非ざるなり。故に錄して詩話に入る。

(梁啓超『飲冰室詩話』)

『飲冰室詩話』に錄する日本人の作品は極めて少ないが、それも或いはこのためかも知れない。二つ目の原因はより重要と思われ、「中國文學の名譽」の爲、もつとはつきり

言えば、中國人の面子の爲である。

梁啓超が『新小説』雜誌創刊の爲に作つた廣告を見てみよう。

本報所登載各篇、著譯各半、但一切精心結撰、務求不損中國文學之名譽。

本報に登載する所の各篇、著譯各半ばし、但だ一切を精心にて結撰し、務めて中國文學の名譽を損わざらんと求む。

(『新小説』第十四號、一九〇二)

この後彼が『新小説』第二十號で『新小説』第一號の出版について言及した時、再度最初の調子を繰り返して言う。「其廣告有云、務求不損祖國文學之名譽。(其の廣告に云う有り、務めて祖國文學の名譽を損わざらんと求むと。)」梁啓超がここで指しているのは主には小説のことであるといえ、彼はこの「中國唯一の文學報」の中に、既に「新樂府」専用の欄を設けようと考えていたが、後に黃遵憲の意見を受け入れて、出版するときにコラムを「雜歌謠」に改

題しており、漢詩には元々僅かな場所が割り當てられていたことがわかる。『新小説』第七號「小説叢話」の中で、彼は嘗て自身と黃遵憲が中國と西洋の詩歌の比較を論じ、西洋の詩歌には長大な作品が多く、中國の詩歌は相對的に短いと思ったが、詞曲戲劇を廣義の詩歌として見たならば、篇幅の宏大なものはいくらでもあるとし、そこで自ら反省して次のように言う。

既而思之、吾中國亦非無此等雄著可與彼頡頏者。吾輩僅求之於狹義之詩、而謂我詩僅如是、其謗點祖國文學、罪不淺矣。

既にして之を思ふに、吾が中國も亦た此等雄著の彼と頡頏すべき者無きに非ず。吾輩 僅かに之を狹義の詩に求め、而して我が詩僅かに是れの如しと謂う、其れ祖國の文學を謗點し、罪淺からず。

このことから、梁啟超の「中國文學」、「祖國文學」の概念の中で、漢詩は疑いなく重要な地位を占めており、それ

清末「詩界革命」起源の再検討（蔡）

を「謗點」することは許せず、その尊嚴を擁護することは、己の負うべき責任であると自任していたことがわかる。西洋の近代文明を學ぶという面では、日本の明治維新は一步先を行っており、中國の有識者が參考として倣うのも當然の道理であつた。しかし日本にあれもこれも學んで構わないうが、ただ漢詩を作ることだけは學べなかつた。なぜならば「詩は吾家事（詩は是れ吾が家の事）」（杜甫「宗武生日」）であり、「中國文學の名譽」に關わるからである。前に引いた大江敬香の「我國民の名譽」を聯想すると、思わず會心の笑みが浮かぶ。「漢詩改革」と「詩界革命」の背後にあつた日中の争いは、實のところ「名譽」の争いであつた。それ以上に何が有るだろうか。

つまるところ、清末の「詩界革命」と明治期の「文明開化新詩」および「漢詩改革」には、明らかに複雑に入り組んだ繋がりが有つたのである。以上論ずるところ、現時點では未だ前者が後者の影響を受けたと完全に認定することはできないにせよ、少なくとも當時の日中兩國の學者達が、

漢詩の運命について共通する危機感を持ち、いずれも改革の方法を考え、新しい時代の要求に適應しようとしていたという歴史的事實には注目すべきである。視野を廣げ、國境を越え、漢詩の歴史の變遷を東アジア漢字文化圏の枠組みの中に位置づけ、多方面から立體的に詳細な觀察を行うことも、現今の學界の新しい時代の要求である。本稿の問題提起は、まさにそれを目的とするものである。

註

- ① 許常安「晚清『詩界革命』詩の用語について——特にその日本語的なもの——」、「斯文」第四十四號、一九六六年。
- ② 『中國文學報』第七十一冊、二〇〇六年。
- ③ 梁啟超「譯印政治小説序」に「彼美、英、德、法、奧、意、日本各國政界之日進、則政治小説爲功最高焉。（彼の美、英、德、法、奧、意、日本各國政界の日進するは、則ち政治小説功最も高しと爲す。）」、『清議報』第一冊（一八九八）とある。「小説界革命」の正式な提唱は、その後の「論小説與群治之關係」（『新小説』第一號（一九〇二））に見える。
- ④ 本文第四章に引く『汗漫錄』參照。
- ⑤ 梁啟超「贈別鄭秋蕃兼謝惠畫」詩に「我昔倡議詩界當革命、

- 狂論頗頌作者頤。吾舌有神筆有鬼、道遠莫致徒自嗤。君今革命先畫界、術無與竝功不訾。（我昔詩界の當に革命すべきを倡議し、狂論して頗る頌く作者の頤。吾が舌に神有り筆に鬼有り、道遠く致すところ莫く徒らに自ら嗤う。君今革命すること畫界を先にし、術與に竝ぶ無く功訾られず。）」とある。
- ⑥ 『飲冰室合集』文集四十五下「詩集」所收。
黃遵憲「酬曾重伯編修」其二に「廢君一月官書力、讀我連篇新派詩。（君の一月の官書力を廢し、我の連篇の新派詩を讀む。）」（錢仲聯『人境廬詩草箋註』卷八）とある。
 - ⑦ 梁啟超には關聯する言論が甚だ多く、前期の代表作は「破壞主義」（『清議報』第三十冊（一八九九））。後『飲冰室合集』專集之二に收録）である。
 - ⑧ 「汗漫錄」、『飲冰室合集』專集二十二。
 - ⑨ 「自由書」附「歲晚讀書錄」、「飲冰室合集」專集之二。

追記：本稿は平成二十九年年度文部科學省科研費基盤研究（C）「明治の『文明開化新詩』と清末の『詩界革命』——近代日中漢詩交流における『逆輸入』——」（課題番号17K02433）の成果の一部である。